

北海道で暮らしながらも自分が生きるこの土地には、どんな歴史が刻まれてきたのか。どなたも興味があることでしょう。考古学好きな方は勿論、北海道・北東北の縄文世界遺産が世界遺産として登録されてから、注目を浴びるこの分野について、第1回目「刀」、第2回目「鍋」、第3回目「玉」の演題で、人文学部現代文化学科教授、縄文世界遺産研究室室長の越田賢一郎先生から、全3回にわたって学びました。



**刀** 講義日時 2023年11月16日(木)  
講義「刀」10:40~12:10

北海道が「日本の北端」という視点に留まることなく、東北アジアの一部としてとらえ、そこに住んでいた人々の交流や繋がりも明らかにする。今、私たちが想像し得る以上に、かつてこの地に住む人々は、様々な文化圏との交流を広く行っていた。北海道の各地で出土が見られる蕨手刀（わらびてとう）。出土遺物から思いがけない地域との繋がりを見い出せます。多くの資料、遺物の写真を引いて語られる講義に、受講生からは満足の声が聞かれました。



**鍋** 講義日時 2023年12月21日(木)  
講義「鍋」13:00~14:30

日本が寒く厳しい氷河期から、海が増え、温暖な気候へと変化するにつれて、食料を求めて移動する狩猟採集の生活から定住の生活に切り替わっていくことで人々の生活様式も変わっていきました。「北海道」はサハリンなど北の大陸の影響も、また津軽海峡を越えて本州からの影響も受ける位置にあり、その文化は一括りにまとめることはできない複数の文化が互いに交錯し、独自の歴史を展開していきます。縄文文化を経て、続縄文文化、擦文文化やオホーツク文化と、この2文化の両方が合わさったトビニタイ文化。律令国家を形成していた本州からの影響。これら文化の融合は、全道的な流通体制も整えていきます。



文化と文化の交錯は、土器の形・文様にも影響を与え、時と共に変容しながら、やがて最後の土器の時代を迎え、鉄鍋の時代に入ります。「人は自分達以外の、他の文化と接触しながら自分の民族意識を持つ」、「それぞれの土地で、私達という意識をもって繋がり合いながら次の時代に繋がっていく。」(講師の言葉より) それぞれの文化が互いに関わり合った時から、影響を与え合いながら人は生きている。人の往来の根本は今も昔も変わりなく、です。

**玉** 講義日時 2024年1月18日(木)  
講義「玉」13:00~14:30



※シトキ  
(金具を中心に玉を周囲に巡らせた胸飾りのある首飾り[左の写真参照])

副葬品としての「玉」の出土状況から、全道的に文化のまとまりが見られるのが12・13世紀頃から。民族意識も確立していき、文化が融合し発展すると共に、お互い交流相手としての付き合いへ。北の大陸・サハリンや南の本州とは、交易・交流しながら、北海道の「アイヌ文化期」と言われる時期は19世紀(本州の鎌倉、室町、安土桃山、江戸時代)まで続きます。大陸や本州など他文化圏で制作された玉や金具で構成されるアクセサリー「シトキ※」。交流のあったこれら地域で作られた玉は、それぞれ趣があり精巧で美しく、ひと粒ひと粒がまさに芸術品です。アイヌの人々が身に付け祭事をする様子を博物館などの展示解説から見る機会もあるでしょう。シトキ等アクセサリーは、大事な場面で自分達が仲間であることを示すときに使用されたそうです。受講生は示される遺跡からの出土状況、遺物などをもとに、北海道は本州にはない独自の文化が展開し、縄文文化からアイヌ文化へと歩んだ時代を学びました。